

## 合唱組曲『長征組歌』における歴史の美学化

### The Aesthetization of History in the Chorus Suites “Long March”

鏡屋 一

Hajime ABUMIYA

*Keywords* : the Chorus Suites, Long March, Xiao Hua, Chinese Communist Party, legitimacy

キーワード：合唱組曲、長征、蕭華、中国共産党、正当性

#### はじめに

「文化大革命」直前の1965年、長征を題材にした合唱組曲が上演された。作詞は当時中国人民解放軍総政治部主任の蕭華<sup>しょうか</sup>将軍、作曲は北京軍区戦友文工団の作曲家たちで、初演も同文工団の歌手と楽員によって行われた。

中国共産党の正統性の基盤である「革命闘争」のうち、長征は毛沢東の支配権を確立する重要な契機であったことから、殊更に神聖性を付与されて記述されるのが通例となっている。中国の伝統文化においてきわめて抽象度の高い詩詞によって歴史を概念化する方法があり、蕭華の詞による歌曲によって長征の歴史を概念化したのが本稿で取り上げる合唱組曲『長征組歌』である。『長征組歌』の制作とは、概念化された歴史を音楽（合唱曲）という形式に昇華させてゆく作業であった。その作業を本稿では「歴史の美学化」と考える。

ここに言う「歴史の美学化」とは、歴史を芸術作品として抽象化することにより、鑑賞者の懐疑精神を麻痺させ、情緒的自己同一化を「強制」する機能を指している。このような機能を期待された「歴史記述」の具体的な姿を明かにし、その意義を評価するのが、本稿の目的である。

#### 第1章 長征組詩の成立

##### 第1節 長征組詩の誕生

合唱曲『長征組歌』の原詩は長征組詩『紅軍不怕遠征難—為紅軍長征三十年而作』（以下『長征組詩』と記す）として1964年11月に書かれている。資料上は「長征組詩」と表記されているが、後述するように蕭華の原「詩」は、宋代以来の文学形式「詞」である。

作者の蕭華は、当時、中国人民解放軍総政治部（以下、総政治部あるいは総政と略記）の責任者であった。蕭華の前任の羅榮桓が1963年12月に死去したため、中央軍委の決定で蕭華が総政の主任となり、1964年9月に正式に中国人民解放軍総政治部主任に任命された。若干48歳であった。総政治部は総参謀部、総後勤部とならび解放軍の枢要を形成し、軍内の政治、組織、規律、軍法から思想、宣伝をも管轄している。

蕭華は1964年2月に肝炎に感染し、北京で治療後、4月下旬から杭州で療養することになった。その間は副主任劉志堅が代行した<sup>1)</sup>。

総政治部主任である蕭華には、思想宣伝の一環として全軍各部隊を挙げて中央紅軍長征勝利30周年記念を慶祝する任務があった。それに合わせて配下の文芸単位が蕭華に長征詞の作成を依頼していた<sup>2)</sup>。

蕭華の伝記作者によれば、1958年夏、総政文化部の若い幹事が北京の街頭の露天の本屋から長征を描いた小冊子を買ってきた。作者は「蕭華」と誤記されていた。蕭華は長征を紹介するこの画集に感激し、出版社に再版を要請した。出版社は再刊を決め、改めて蕭華にこの画集の再版の序を求めた。このような経緯から、蕭華は画集以外の形式で長征の全過程を題材とした、舞台作品の制作を構想するようになったという<sup>3)</sup>。

杭州での療養期間は蕭華の創作意欲をかきたてたようである。肖華は17歳で長征に参加し政治委員をも務め、自ら参加した江西出發後からの紅一方面軍の状況についてはよく知っているが、紅二・四方面軍、紅二十五軍に関しては知識を補う必要があり、長征に関する大量の文献を渉獵した。劉伯承元帥の「回顧長征」など長征に参加した同志の回想録を読み、毛沢東の長征に関する詩詞も読んだ。また、杭州療養中に唐詩・宋詞を集中的に読んでおり、その表現力と優美な韻律を好しとした<sup>4)</sup>。

蕭華の長征の「歴史」の構想は、長征中の12の典型的な事件を選択することであり、その12の事件とは、(1) 告別、(2) 突破封鎖線、(3) 進遵義、(4) 入雲南、(5) 飛越大渡河、(6) 過雪山草地、(7) 到吳起鎮、(8) 祝捷、(9) 報喜、(10) 大会師、(11) 会師獻礼、(12) 誓師抗日である。そして作品の形式は宋詞にならい、12首からなる連作詞とし、1首が「三七句、四八開」すなわち4つの3字句、8つの7字句の計12行68字とするが、格律からは自由な作品とし、平仄と対仗の制限を受けないものとした<sup>5)</sup>。

1964年9月から11月まで、蕭華は長征組詩の制作に専念した。1964年11月、初稿完成後、蕭華は、秘書李圭を通して広く意見を求めて修正を施した。修正は10回近くに及んだ。最終的に毛沢東の長征を詠んだ「詞」の一句を借り「紅軍不怕遠征難」を総題目とする長征組詩が、11月中旬、正式に定稿となった<sup>6)</sup>。

## 第2節 長征組詩の構成

蕭華の長征組詩『紅軍不遠征難』は、1965年7月1日『解放軍報』に全文が掲載され、『解放軍文芸』が転載したが、この1965年版の詞は合唱曲としての作曲上の都合から改変がほど

こされており、1首12行68字の原則から逸脱している。本稿では、最も原案に忠実であると推測する『長征大事典』版に従った<sup>7)</sup>。

長征組詩（「紅軍不怕遠征難—為紅軍長征三十年而作」1965年5月）は以下のとおり全12首からなる。

## 1. 告別

紅旗飄、	(紅旗はためき、)
軍号響。	(軍用ラッパが響く。)
子弟兵、	(人民の軍隊が、)
別故郷。	(故郷に別れを告げる。)
紅軍主力上征途、	(紅軍の主力が長征に出発する。)
戰略轉移去遠方。	(戰略的轉移で遠方に赴く。)
男女老少來相送、	(老若男女が見送りに来る。)
熱泪沾衣敘情長。	(熱い涙が衣を濡らし感情が高ぶる。)
烏雲遮天難持久、	(黒雲が天を覆っても長くは続かない。)
紅日永遠放光芒。	(赤い太陽は永遠に光を放つ。)
革命一定要勝利、	(革命は必ず勝利する。)
敵人終将被埋葬。	(敵は最後には埋葬される。)

## 2. 突破封鎖線

路迢迢、	(路は遠く、)
秋風涼。	(秋風は冷たい。)
敵重重、	(敵が包囲し、)
軍情忙。	(軍事情勢は急を告げる。)
紅軍夜渡于都河、	(紅軍は夜于都河を渡り、)
固陂新田打勝仗。	(固陂、新田で戦勝した。)
佯攻汝城占宜章、	(汝城を攻めるとみせて宜章を占領。)
跨過瀟水搶湘江。	(瀟水を渡り、湘江で激突。)
三十昼夜飛行軍、	(三十昼夜、飛ぶように進軍し、)
突破四道封鎖牆。	(四路の封鎖線を突破する。)
困追堵截奈我何、	(包囲殲滅でも我をどうもできない。)
数十万敵空惆悵！	(数十万の敵が空しく失望する。)

## 3. 進遵義

苗嶺秀、	(苗嶺が美しく、)
溪水清。	(溪水は清んでいる。)
百鳥啼、	(多くの鳥が鳴き、)
報新春。	(新春を告げる。)
烏江天險擋不住、	(烏江の天險でも止められない。)
婁山刀靶殲敵兵。	(婁山、刀靶で敵を殲滅する。)
遵義會議放光輝、	(遵義會議が光輝を放ち、)
全党全軍齊歡慶。	(全党全軍が一斉に歡喜する)
萬眾歡呼毛主席、	(みなが毛主席を歡呼し、)
工農踴躍當紅軍。	(労働者と農民が先を争って紅軍に加わる。)
英明領袖來掌舵、	(英明な領袖が舵を取り、)
革命磅礴向前進。	(革命が勢いよく前進する。)

## 4. 入雲南

橫斷山、	(山を橫断し、)
路難行。	(路は行き難し。)
敵重兵、	(敵の大軍が、)
壓黔境。	(貴州省境に迫る。)
戰士雙腳走天下、	(戰士は二本の足で天下をすすみ、)
聲東擊西出奇兵。	(東と見せて西を攻め奇襲をする。)
烏江天險重飛渡、	(烏江の天險を再度飛ぶように渡る。)
兵臨貴陽逼昆明。	(軍は貴陽に臨み、昆明に逼る。)
敵人棄甲丟煙槍、	(敵は鎧を捨てて銃を捨てた。)
我軍乘勝趕路程。	(我が軍は勝利に乗じて路を急ぐ。)
調虎離山襲金沙、	(敵をおびき出して、金沙江を攻める。)
主席用兵真如神。	(主席の用兵はまったく神業だ。)

## 5. 飛越大渡河

水湍急、	(水は流れが急で、)
山峭聳。	(山は高く聳える。)
雄關險、	(堅固な關所は險しく、)
豺狼凶。	(豺狼が猛々しい。)

健児巧渡金沙江、 (健児が巧みに金沙江を渡り、)  
兄弟民族夾道迎。 (兄弟の民族が狭い道で出迎える。)

安順場辺孤舟勇、 (安順場では舟一艘に勇士が、)  
踩波踏浪殲敵人。 (波濤を踏み越え敵を殲滅する。)  
昼夜兼程二百四、 (昼夜兼行で二百四里を進み、)  
猛打窮追奪瀘定。 (猛打窮追し瀘定橋を奪う。)  
鉄索橋上威風頭、 (鉄索橋に威風が現われ、)  
勇士万代留英名。 (勇士は永遠に英名をとどめる。)

#### 6. 過雪山草地

雪皚皚、 (雪は白く、)  
野茫茫。 (野は広くはてしない。)  
高原寒、 (高原は寒く、)  
炊断糧。 (食糧は絶えた。)  
紅軍都是鋼鉄漢、 (紅軍はみな強い者たちなので、)  
千錘百煉不怕難。 (どのような困難な試練も怖れない。)

雪山低頭迎遠客、 (雪山は頭を下げて遠来の客を迎え、)  
草毯泥氈紮營盤。 (草や泥の絨毯で兵營を張る。)  
風雨侵衣骨更硬、 (風雨が服に染み、いっそう硬骨となる。)  
野菜充飢志愈堅。 (野菜で飢えを充たし、志はさらに堅固になる。)  
官兵一致同甘苦、 (官も兵も一緒に甘苦を共にする。)  
革命理想高於天。 (革命の理想は天よりも高い。)

#### 7. 到吳起鎮

鑼鼓響、 (銅鑼が響き、)  
秧歌起。 (秧歌が始まる。)  
黄河唱、 (黄河が唱い、)  
長城喜。 (長城が喜ぶ。)  
臘子口上降神兵、 (臘子口に神の兵が降下する。)  
百丈懸崖当雲梯。 (百丈の絶壁も雲梯となる。)

六盤山上紅旗展、 (六盤山上に紅旗が翻る。)  
勢如破竹掃敵騎。 (破竹の勢いで敵騎を掃討する。)

陝甘軍民伝喜訊、(陝西甘肅の軍民に喜びの知らせを伝える。)  
 征師勝利到呉起。(長征は勝利し呉起鎮に到着する。)  
 南北兄弟手携手、(南北の兄弟が手を携えて、)  
 拡大前進根拠地。(根拠地を拡大し前進する。)

## 8. 祝捷

大雪飛、(大雪が飛び、)  
 洗征塵。(長征の塵を洗う。)  
 敵進犯、(敵が侵犯し、)  
 送礼品。(礼品を送る。)  
 長途跋涉足未穩、(長途跋涉してもまだ不穩である。)  
 敵軍圍攻形勢緊。(敵の包圍攻撃が迫っている。)

主席戰場来指揮、(主席が戰場に来て指揮をする。)  
 全軍振奮殺敵人。(全軍が奮起して敵を殺す。)  
 直羅滿山炮声急、(直羅鎮の戦闘で山中に砲声が響く。)  
 万余敵兵一網尽。(一万人以上の敵兵を一網打尽にする。)  
 活捉敵酋牛師長、(敵の首長牛師長を生け捕りにする。)  
 軍民凱歌高入雲。(軍民の凱歌が高く雲まで届く。)

## 9. 報喜

手足情、(兄弟の感情、)  
 同志心。(同志の気持。)  
 飛捷報、(速達が届き、)  
 伝佳音。(よい知らせを伝える。)  
 英勇的二、四方面軍、(勇敢な二、四方面軍は、)  
 転戦数省久聞名。(数省を転戦し長く名を知られている。)

歴尽千辛万般苦、(無数の辛苦を舐めてきた。)  
 勝利会聚甘孜城。(勝利のうちに甘孜城に集合する。)  
 踏破岷山千里雪、(岷山の千里の雪を踏破し、)  
 高歌北進并肩行。(高歌放吟して北進し、肩を並べて行く。)  
 辺区軍民喜若狂、(辺区の軍民は狂ったように喜び、)  
 紅旗招展迎親人。(紅旗を振って親しい人が出迎える。)

## 10. 大会師

紅旗飄、	(紅旗はためき、)
軍号響。	(軍用ラッパが響く。)
戦馬吼、	(戦馬は嘶き、)
歌声亮。	(歌声が響く。)
鉄流兩万五千里、	(行軍すること二万五千里、)
紅軍威名天下揚。	(紅軍の威名は天下に称讃される。)
三支勁旅大会師、	(三つの軍隊が大合流する。)
日寇胆破蒋魂喪。	(日本軍の肝は潰れ、蒋介石の魂は喪われる。)
軍也樂来民也樂、	(兵士も民衆も喜んでいいる。)
万水千山齐歌唱。	(いたるところで歌声が聞こえる)
歌唱領袖毛主席、	(領袖毛沢東を称える歌声だ。)
歌唱偉大共産党。	(偉大な共産党を称える歌声だ。)

## 11. 会師献礼

頂天地、	(天地を頂き、)
志凌雲。	(志は雲を凌ぐ。)
山城堡、	(山地の街の要塞で、)
軍威振。	(軍威が高揚している。)
夜色朦朧群山隱、	(夜の朦朧で多くの山が姿を隠す。)
三軍奮勇殺敵人。	(三軍は勇敢に敵を殺す。)
火光万道迎空舞、	(どの道にも松明の明りが空に対して舞っている。)
霹靂一声動地鳴。	(一回の霹靂が大地をうならせる。)
兄弟并肩顯身手、	(兄弟は肩を並べて腕前を發揮して、)
痛殲蒋賊王牌軍。	(蒋介石の主力軍を殲滅する)
旭日東昇照戰場、	(太陽が東に昇り、戰場を照らし、)
会師献礼載功勳。	(大合流の引き出物として功績勳章を運んでくる。)

## 12. 誓師抗日

日寇侵、	(日本軍が侵略し、)
災難深。	(災難が深刻だ。)
国民党、	(国民党は、)
当逃兵。	(逃亡兵となった。)

紅軍集結陝甘寧、（紅軍は陝甘寧根拠地に終結し、）  
 抗日風暴卷煙雲。（抗日の嵐が煙雲を巻き上げる。）

呼吁停戰驅日寇、（いざ停戦して日本軍を駆逐せんと、）  
 我党宣言普天応。（我が党の宣言に全国が呼応した。）  
 軍民怒火千万丈、（軍民の怒りの火が高く上がり、）  
 揮戈誓師大進軍。（武器を手に取り必勝を誓い出征する。）  
 排山倒海風雷起、（山を押し倒し海をひっくりかえす勢で風雷が起り、）  
 解放祖国大地春。（祖国を解放し大地に春がくる。）

時系列順に配置された詞の内容を勘案すれば、やはり紅一方面軍の事例が中心になっている。そして長征の歴史そのものは1首から10首までで終了しており、11首・12首は内容として重複していることは否めない。

## 第2章 長征組詩の背景

### 第1節 黄鎮『長征画集』

蕭華の詩作を刺激していた背景的作品として、まず第一に、黄鎮の『長征画集』が挙げられる<sup>8)</sup>。

黄鎮は安徽省桐城県の農村出身。1934年に瑞金で開催された中華ソビエト共和国全国第2回代表大会では3m×10mのペンキ画作品「粉碎敵人的圍剿」を出品した。長征に参加し、途上多くのスケッチを作成した。長征終了後、四、五百枚の作品のうち24枚だけが残り、これを画集『二万五千里長征図』に収録した。作品は、(1) 紅軍突破了国民党反動軍隊の五次圍剿、(2) 中国工農紅軍離開根拠地、踏上了征途、(3) 反動軍隊用飛機大炮、追剿阻截紅軍、(4) 紅軍逼近雲南省会昆明、(5) 紅軍渡過金沙江、(6) 紅軍強渡大渡河、(7) 紅軍翻越大雪山、(8) 勝利到達陝北、の8つに分類された<sup>9)</sup>。

この画集を上海の作家で編集者の阿英（錢杏邨）が入手し、1938年10月に自分の出版社である風雨書屋から『西行漫画』と題して2000部を出版した<sup>10)</sup>。阿英は安徽省蕪湖出身。1926年に共産党入党、1927年太陽社を組織、1930年左翼作家連盟に加入、上海で郭沫若、夏衍らと『救亡時報』を刊行、『文献』雑誌の主編となる<sup>11)</sup>。

当時「長征」の語は国民党支配地区では使用禁止であった。元の画集は蕭華の山東根拠地から上海に伝来したもので、蕭華本人が長征に参加していたことから、初版は「作者蕭華」と記した。『西行漫画』は主として中国南方に流布したが、風雨書屋はまもなく閉鎖され画集も増刷できず入手が困難になった<sup>12)</sup>

1958年12月に熱心な読者が偶然北京図書館で「蕭華」の『西行漫画』を発見し、劉伯羽も



隆福寺の露店でこの画集を発見し、歴史的意義があるものであると見て重版を提案した。人民美術出版社がこの提案を承けて、天津在住の阿英を訪ね阿英所蔵のものを借用して底本とし3000冊を出版した。出版にあたり人民美術出版社の編集者の邵宇が当時総政治部副主任であった蕭華を訪ね序文の執筆を依頼した。画集を見た蕭華は著者名が誤記されていることを知り、自分の著作ではないと証言し、出版にあたり作者名は無記載とした。蕭華は序文の中で、画集は董振堂の肖像を描いていることから董のいた紅五軍団の人物だろうと見当をつける<sup>13)</sup>。

1962年4月、人民美術出版社は毛沢東延安講話20周年を記念して『西行漫画』の再刊を決めた。黄鎮は長征当時は紅五軍団宣伝部科長であったことから、出版社の編集者邵宇が黄鎮(1909-1989、1961年から外交部副部長、1964年1月から駐仏大使)を訪ねて、『西行漫画』の作者について尋ねると、黄鎮は自分の作だと答え、最初の老人の画は林伯渠同志を描いたものだとも言う。画集再刊に当り黄鎮は序文を蕭華に依頼し、この再版の画集から題名を『長征画集』と改めた<sup>14)</sup>。

黄鎮は、魏伝統に24枚の画に詩をつけてもらう。魏伝統は1908年生れ、1926年に郭沫若らの創造社に加入。1928年に共産党入党。1933年に紅四方面軍に加わり、紅三十三軍政治部秘書長となる。董振堂らと長征に参加した。1948年解放軍総政治部第一室主任、総政秘書長を歴任している<sup>15)</sup>。

1962年4月、蕭華はこの画集についてこう評価していた。画集は「偉大な長征の断片的な記録であり、真実の革命の資料であり、貴重な芸術作品である。……作者は紅軍戦士の革命的楽観主義の精神を特に際立たせて描いており、また、紅軍が通り過ぎてきた少数民族地区の風景や『干人儿(貧困者)』の苦しい生活を記録している。このような作品は今でも珍しい」と<sup>16)</sup>。

黄鎮(当時國務院文化部長)から1983年に乃桐に送られた『長征画集』は精美な装丁で、蕭華の「序」、黄鎮の24枚の「画」、魏伝統の「題詩」、「紀事」の4部分からなるという<sup>17)</sup>。

1986年7月、『長征画集』はすでに高価で入手困難となっていたことから、長征勝利50周年を記念して普及版を出版し、さらに外文出版社が英語、仏語、日本語版を出版した<sup>18)</sup>。

1938年の『西行漫画』初版の際、阿英はその序文で次のように述べている。「画は24枚だが中国人民の偉大さと堅実さを表現している。」「困難に耐え、よく働き、民族の解放のために、よるこんで一切を忍従する。これは天地を驚かし鬼神を動かす意志である。このような意志が、絵の中で、きわめて現実的に、楽観的に、表現されている」と<sup>19)</sup>。

この画集は、詩人たちの想像力を大いにかき立てたようである。現代中国の有名な詩人である臧克家<sup>ぞうこくか</sup>は、画集を見ながら次の詩を書いている<sup>20)</sup>。

#### 開巻

画冊打開心也開、	(画集を開けば心も開く)
雄風浩蕩撲滿懷、	(大きな風が吹いて胸を打つ)
本子不大容量大、	(冊子は小さいが中身は多い)

万水千山滾滾来。 (万水千山を越えてやって来る)

#### 渡湘江

紅軍渡湘江、 (紅軍、湘江を渡る)  
 前程長又長。 (行く先は遠い)  
 江水有情意、 (川の水に情けあり)  
 滾滾翻波浪。 (波を立てとうとうと流れる)

#### 勝利

遵義城頭大旗開、 (遵義の城頭に大旗が開く)  
 大旗開、勝利来！ (大旗が開き、勝利が来る)  
 白軍紛紛作俘虜、 (白軍は続々と捕虜となり)  
 走進画里現丑態。 (絵の中で醜態をさらしている)

#### 跨越

草地陷人坑、 (草地では人が穴に落ち)  
 戰士脚杆硬。 (戰士の足は頑健だ)  
 大渡河里船似箭、 (大渡河の船は矢のようだ)  
 鉄索橋上走英雄。 (鉄索橋を英雄たちが進む)

#### 翻雪山

夾金山、頂着天、 (夾金山は天を頂く)  
 没有口子的一道関！ (逃げ道のない難関だ)  
 紅軍攀上又翻下、 (紅軍に登りそして降りる)  
 当作了胯下的溜溜板。 (腰下の滑り板を作る)

#### 老林之夜

老林之夜墨墨黑、 (老林の夜は真っ暗闇)  
 篝火的光熱又紅。 (篝火の明りはいっそう赤い)  
 勝利故事講不完、 (勝利の物語は話しきれない)  
 辛苦釀成甜甜的夢。 (艱難辛苦は快適な甘い夢を生む)

#### 烘餅

烘餅炉前香噴噴、 (烘餅は炉の前でもよい香りがする)  
 心靈手巧小紅軍。 (利口で器用な小紅軍)

算了餅数算人数、 (餅を数えて人数を数える)  
 青稞磨麵是珍品！ (裸麦の麵は珍品である)

### 鉄的洪流

革命靈感涌筆尖、 (革命の靈感が筆から湧き出る)  
 黒墨射出紅光彩。 (黒い墨から赤い光が出でくる)  
 一幅一幅翻濤浪、 (ひとつひとつが波を起こす)  
 鉄的洪流倒灌來。 (鉄の大流が逆流してくる)

臧克家の詩作は黄鎮の絵画に触発されたものである。「烘餅」や「青稞磨麵」といった生活感溢れる語彙は絵画が捉えた世界をなぞったものである。だが雪山や鉄索橋のイメージが置かれている文脈に関しては、回想録、話劇、映画を通過したものであるようにみえる。先行するイメージに対する情緒的な自己同一化の成果であると言えよう。それは長征組詩についても同様である。

## 第2節 陸定一「長征歌」

『長征画集』に次いで、蕭華の長征組詩には陸定一の詩からの強い影響が見られる。

陸定一は中央ソビエト地区でソビエト地区共青团宣伝部長を勤め、長征に参加し、その間は『紅星報』主編、総政治部宣伝部長、陝甘支隊政治部宣伝部長等の職にあった。主として長征期間中の政治宣伝工作面で貢献した人物で、詩と文をよくした。陸定一は長征途上に多くの詩を書いている。党中央の決定を詩という形で末端へと伝播させる役割を帯びていた。陸の詩はその後の戦争において、味方を団結させ、敵を攻撃する有力な武器となったと評価されている。戦火を経て彼の作品はごく少数を除きほとんどが失われてしまった<sup>21)</sup>。陸の詩は詩詞と政治の関係を考える上でひとつの典型を与えていると考えられることから、その代表的なもの3首について検討しておきたい。

### (1) 「布告詩」

1935年5月、会理で開催した中共中央政治局会議では、北上し大渡河を渡り、紅四方面軍と合流することが決定した。このため紅軍は大涼山を越えて、彝族地区を通過しなければならず、偏見を捨てて彝族の民俗を理解して彝族と交渉し、その協力を得なければならなかった。紅軍を啓蒙するため、陸定一は詩を書き、紅軍総司令朱徳の名義で以下の詩を發布した。それが「布告詩」である<sup>22)</sup>。

中国工農紅軍、解放弱小民族。(中国労働農民紅軍は、弱小民族を解放する。)

一切夷人貧民、都是兄弟骨肉。(彝族、貧困者はすべて血の通った兄弟である。)

可恨四川軍閥、圧迫夷人太毒。(四川軍閥は許せない。彝族を酷く圧迫する。)  
 苛捐雑税重重、又復妄加殺戮。(重い税を課し、みだりに殺害しようとする。)  
 紅軍万里長征、所向勢如破竹。(紅軍の万里の長征は、向かうところ破竹の勢い。)  
 今已来到川西、尊重夷民風俗。(すでに四川西部に到達し、彝族の風俗を尊重する。)  
 軍紀十分嚴明、不動一絲一粟。(軍紀はたいへん厳格で、糸一本、粟一粒も奪わない。)  
 糧食公平購買、餉錢交付十足。(食糧は公平に購入し、そのとおり支払っている。)  
 凡我夷人群衆、切莫懷疑畏縮。(わが彝族の民衆よ、疑ったり怖れたりしないでよい。)  
 趕快團結起來、共把軍閥驅逐。(さあ團結して共に軍閥を追い払おう。)  
 設立夷人政府、夷族管理夷族。(彝族の政府を樹立し、彝族が彝族を治めるのだ。)  
 真正平等自由、再不受人欺辱。(真の平等と自由を得てもう他人に侮辱させない。)  
 希望努力宣傳、將此廣播西蜀。(宣伝に努めて四川西部にも広めてもらいたい。)

この布告は6字1句、同一の脚韻で貫かれている。意味も分かりやすく、朗読して覚えやすくなっている。布告では四川軍閥の罪行を暴露し、中国共産党と工農紅軍の宗旨、任務、政策、紀律を明記している。紅軍のみならず彝族に対しても共産党と紅軍について理解する契機ともなった。彝族との直接交渉を担当した劉伯承(紅軍先遣隊司令)は特にこの布告の宣伝に尽力した。自分の部隊に対し、「彝族は矢を打ち銃を放つのは漢人を信用しておらず、言葉が通じないからだ。だが彼らは蔣介石の命令に服従しているのではないし、国民党軍とは違っている。われわれは党の民族政策を厳重に執行して、朱徳総司令の彝族を落ち着かせるこの布告を広く宣伝し、平和裏に彝族地区を通過できるようにしよう」と宣言した。こうして紅軍は大きな衝突もなく通過したばかりか、多くの彝族が紅軍に加わった<sup>23)</sup>。

ところで、この「布告詩」こそが最初に「紅軍万里長征」という用語を使ったことが知られている。よって「万里長征」という語は陸定一の創造した語で、朱徳の承認を得て伝播したものである。

## (2) 「兩大主力軍會合歌」

1935年6月12日、紅一方面軍が夾金山を越え、先に懋功に到達した紅四方面軍と合流した。遠路長征してきた兵士たちは感激して喜び合った。だが、合流後の方針が両軍で齟齬したため、紅一、四方面軍の合流の意義を紅軍内に宣伝する必要が生じた。中共中央は紅軍が北上し川陝甘根據地を樹立し、長征と抗日を結びつけていた。紅四方面軍の張国燾はそれに反対した。こうした状況において、陸定一は「兩大主力軍會合歌」を書いた<sup>24)</sup>。歌詞は以下のとおりである。

兩大主力軍 岷山脈勝利會合了。 (二大主力軍が岷山脈で見事に合流した。)  
 歡迎四方面軍 百戰百勝英雄弟兄。 (四方面軍の連戦連勝の英雄の兄弟を歓迎する。)

団結我們工農武裝不可摧毀的力量、 (我々労農の軍隊の破壊不能の力を団結しよう。)  
 唉! (そうだ。)  
 団結我們工農武裝不可摧毀的力量、 (我々労農の軍隊の破壊不能の力を団結しよう。)  
 堅決赤化川陝甘。 (しっかりと川陝甘を赤化しよう。)  
 万余里長征經歷八省險阻与山河、 (一万里余りの長征で八省の險阻山河を経て、)  
 鉄的意志血的犠牲换来偉大的会合。 (鉄の意志、血の犠牲で購った偉大な合流である。)  
 為了實現抗日救国解放民族的事業、 (抗日救国、民族解放の事業を実現するために、)  
 唉! (そうだ。)  
 為了實現抗日救国解放民族的事業、 (抗日救国、民族解放の事業を実現するために、)  
 高挙紅旗向前進。 (紅旗を高く掲げて前進しよう。)

「兩大主力軍会合歌」は情熱的で力強い調子で全軍に呼びかける形になっている。二大主力紅軍の合流を祝福するとともに、「抗日救国」「民族解放」という党中央（毛沢東）の戦略方針を合流後の紅軍の主要な任務とすることを述べ、党と紅軍の分裂の危機に際して軍全体を統一しようとしている。

### (3) 「打騎兵歌」

紅軍が四川西北に到着すると、敵の奇兵の襲撃を受けた。中央軍委は、1935年8月6日に「關於对敵人騎兵作戰的指示」を頒布し、騎兵の基本的な特徴と欠点について注意を促した。劉伯承、葉劍英等も講義を行なった。陸定一と楊尚昆の妻は、紅軍中でも著名な歌手で戯劇教育家の李伯釗と合作で「打騎兵歌」を書き、对騎兵攻撃の要点を歌曲にして、部隊で歌わせた<sup>25)</sup>。「打騎兵歌」の歌詞は以下のとおりである。

敵人的騎兵不需怕、 (敵の騎兵は恐れるに足りない。)  
 沈著勇敢来打它。 (落ち着いて勇敢にやっつけよう。)  
 目標又大又好打、 (目標が大きいほどやっつけるのによい。)  
 排子槍齊放易射殺。 (銃を並べて一斉射撃で簡単に葬れる。)  
 我們瞄准它! (やつらに狙いを定めろ! )  
 我們打垮它! (やつらを叩き潰せ! )  
 我們消滅它! (やつらを消滅しよう! )  
 無敵的紅軍是我們、 (無敵の紅軍とは我々のことだ)  
 打垮了敵人百万兵。 (敵の百万の兵も叩き潰す。)  
 努力再学打騎兵、 (騎兵をやっつけるのを覚えてしまえば、)  
 我們百戰要百勝。 (我々は百戦百勝できる。)

この詩については作曲家の李伯釗が曲を作り『紅星報』に発表すると、多くの紅軍の指戦員の関心を引き、紅一方面軍の各連隊に伝播した。紅四方面軍の指戦員もこの歌を喜んだ。そこでさらに「打騎兵舞」という踊りを作り、紅軍政治部が各宣伝隊に通知し毛爾蓋に人を派遣してこの踊りを学習させた。歌と踊りが結合し、紅軍兵士の学習がさらに進展した<sup>26)</sup>。

#### (4) 「長征歌」

陸定一の作品が蕭華の長征組詩に影響していることが想定されるのは、陸の「長征歌」によってである。

1935年10月、陝甘支隊が呉起鎮に到着し、陝北紅軍と合流した。この中央紅軍の長征成功は、国内外に広く影響を与えた。しかし、軍内の一部には誤った認識をもつ者がおり、悲観論を散布していた。そこで中央紅軍が陝北に到着してから、長征の戦闘の経過を回顧し、長征の業績を肯定し、長征の歴史的経験を総括することは、思想を統一し、幹部を教育し、紅軍の指戦員が前進を続けるよう鼓舞し、新局面を開拓するというさし迫った任務となる。このような目的から、陸定一は紅軍総政治部白軍工作部部长の賈拓夫と協力し「長征歌」を作った<sup>27)</sup>。「長征歌」の歌詞は次のとおりである。

十月里来秋風涼、 (十月は秋風が涼しく、)  
中央紅軍遠征忙、 (中央紅軍は遠征で忙しい。)  
星夜渡過于都河、 (星の夜に于都河を渡り、)  
古陂新田打勝仗。 (古陂、新田で戦勝する。)

十一月里走湖南、 (十一月は湖南を進み、)  
宜臨藍道一起占、 (宜臨、藍道を一挙に占領する。)  
冲破兩道封鎖線、 (二路の封鎖線を突破し、)  
嚇得何鍵狗膽寒。 (何鍵を脅かし震え上がらせる。)

十二月里過湘江、 (十二月は湘江を渡り、)  
廣西軍閥大恐慌、 (廣西軍閥は大恐慌を起す。)  
四道封鎖線都突破、 (四路の封鎖線はみな突破し、)  
勢如破竹誰敢當。 (破竹の勢いは誰も防げない。)

一月里来梅花香、 (一月は梅の花が香り、)  
打進貴州過烏江。 (貴州に攻め入り、烏江を渡る。)  
連占黔北十数縣、 (貴州北部の数十県を続けて占領し、)  
紅軍威名天下揚。 (紅軍の威名は天下に揚がる。)

- 二月里来到扎西、 (二月は扎西に到達し、)  
 部隊改編好整齐、 (部隊を改編して陣容を整える。)  
 發展川南游擊隊、 (四川南部に遊撃隊を展開し、)  
 擴大紅軍三千幾。 (紅軍を三千余りに拡大する。)
- 三月打回貴州省、 (三月は貴州を再攻撃し、)  
 二次占領遵義城。 (遵義の街を二度占領する。)  
 打坍王家烈八個団、 (王家烈の八個師団を打ち破り、)  
 消滅薛吳兩師兵。 (薛岳と吳奇偉の軍隊を殲滅する。)
- 四月里来向南進、 (四月は南に進軍し、)  
 打了貴陽打昆明 (貴陽を攻め、昆明を攻める。)  
 巧妙渡過金沙江。 (巧みに金沙江を渡り、)  
 浩浩蕩蕩蜀中行。 (堂々と四川中部を進軍する。)
- 五月里来瀘定橋、 (五月は瀘定橋で、)  
 劉文輝打得如飛跑、 (守備軍の劉文輝は飛んで逃げた。)  
 大渡河天險從容過、 (大渡河の天険も從容と渡り、)  
 十七個英雄姓名標。 (十七名の英雄が名を揚げる。)
- 六月里来天氣熱、 (六月は気温が高くなるが、)  
 夾金山上還積雪、 (夾金山ではまだ積雪がある。)  
 一四兩個方面軍、 (一方面軍と四方面軍は、)  
 懋功取得大会合。 (懋功で大合流を果たす。)
- 七月進入川西北、 (七月は四川西北に進入し、)  
 黑水蘆花青裸麥、 (黒い水、葦の花、裸麦ばかり。)  
 艱苦奮斗為哪個、 (艱苦奮闘するのは何のため、)  
 為了抗日救中国。 (抗日し中国を救うため。)
- 八月繼續向前進、 (八月はさらに前進し、)  
 草地行軍不怕冷、 (草地の行軍でも冷たさを怖れない。)  
 草地從來少人過、 (草地はもとよりほとんど人が通らないが、)  
 無堅不摧是紅軍。 (どんな困難にも負けないのが紅軍だ。)

九月出發潘州城、（九月は潘州城を出発し、）  
 陝甘支隊東北行、（陝甘支隊は東北に行く。）  
 臘子口渭河安然過、（臘子口も渭河も平然と渡り、）  
 打了歩兵打騎兵。（歩兵と騎兵を攻撃する。）

二万里長征到陝北、（二万里の長征も陝北に到着し、）  
 南北紅軍大會合、（南北の紅軍が大合流する。）  
 粉碎敵人新“圍剿”、（敵の新たな「包圍掃討」を粉碎し、）  
 統一人民新中国！（人民の新中国を統一する。）

このように陸定一は、七言絶句の韻律を借りた叙事詩の手法を採用し長征を叙述した。長征は13ヵ月かかったので、1ヵ月1首で13首とし、こうして長征の全過程を描き出している<sup>28)</sup>。

1983年4月に、遵義会議の意義を強調するために、毛沢東生誕90周年を記念して、陸定一は「長征歌」のうち一月の「一月里來梅花香、打進貴州過烏江、連占黔北十數縣、紅軍威名天下揚」を改訂し、「一月進入貴州地、軍取烏江到遵義。遵義會議載史冊、保証長征得勝利」としている。後の時代による「歴史」の編集である。

長征の歴史を時系列によって分断し（陸定一は13個、蕭華は12個）、後に長征物語の構成要素となる物語群をそれぞれの典型的な事件として配置しているなど、蕭華の長征組詩の基本的なアイデアは陸定一の「長征詩」に由来している。とくにここで指摘しておかなければならないことは、「長征詞」の「十月」である。

十月里來秋風涼、中央紅軍遠征忙、星夜渡過于都河、古陂新田打勝仗。

は、長征組詩の第2首「突破封鎖線」の前段：

路迢迢、秋風涼。紅軍夜渡于都河、固陂新田打勝仗。

と酷似しているという点である。「秋風涼」「夜渡于都河」「固（古）陂新田打勝仗」などは、陸定一の作品からの借用であるように見える。

#### （4）毛沢東の詩詞

毛沢東の詩詞も直接に蕭華の長征組詩に影響を与えていると見られる。毛沢東の詠んだ長征に関する詩詞には、例えば以下のものがある<sup>29)</sup>。

「憶秦娥—婁山関」（1935年8月）は、江西撤退の悲惨と婁山関の勇敢な戦闘を描く。後に作曲家の陸祖龍が曲を作り、歌曲として歌われている。「西風烈」「霜晨月」という3字句を用



いた「詞」の魅力こそが、長征組詩の文学的形式の選択に影響したと考える。

「清平楽—六盤山」（1935年10月）甘肅に到達し六盤山での騎兵戦に勝利し紅軍の成功を詠っている。この詞も中央楽団の集団創作として曲が当てられ歌曲として歌われた。毛の詩詞には、ほかに艱難辛苦の山越えを詠った「十六字令三首」（1934年～1935年）、眼前に聳える崑崙山を征服し理想社会の建設を詠った「念奴橋—崑崙」（1935年10月）がある。いずれもその気宇壮大さは独特の境地に達している。

特に長征の全行程を詠んだ「七律—長征」（1935年10月）は、第一句「紅軍不怕遠征難」は蕭華の長征組詩の原題として使われ、また第二句の「万水千山」も陳其通の話劇やその映画版の表題ともなり、長征の代名詞として使用されている。この「詞」も後に彦克と呂遠が曲を作り、歌曲として歌われている。

### 第3節 長征回憶録

#### （1）劉伯承「回顧長征」

蕭華の長征組詩の制作において大きな影響を与えているとみられるのが、劉伯承將軍の「回顧長征」を始めとする長征参加者たちの回想録である<sup>30)</sup>。

劉伯承の回想録は大きく5段に別れている。

- ① 王明の「左傾」機会主義の支配、正規戦の失敗、毛沢東の遊撃戦、運動戦の有効性について述べ、長征とは根拠地脱出であり、準備もなく出発したこと、湘江渡河作戦の悲惨な戦いについて述べている。
- ② 中央に反対する毛沢東の方針で、二、六軍団との合流計画を放棄し、湖南から貴州へ進軍したこと、1935年1月に、烏江を強硬渡河し、遵義を占領した後、ようやく12日間の休養期間となり、その際に中央政治局拡大会議（遵義会議）を開催し、「左傾」の誤りを正し方針転換を果たしたこと。
- ③ 赤水河を4回渡る運動戦を展開したこと、婁山関の戦い、貴陽をかすめ昆明に迫るとみせかけて、西へ向い、金沙江を渡るという奇策の勝利について述べ、彝族地区を通過し、その後、安順場での一艘の小舟に17人の勇士が活躍する渡江作戦、瀘定橋の渡河、大渡河の突破、大雪山（夾金山）越え、大維、懋功の占領、および四方面軍と合流を描く。
- ④ 張国燾の右傾機会主義は、合流後に党中央の北進政策を否定し西北へ進軍したこと。毛沢東のいる一方面軍は、湿地帯を渡り、毛児蓋で1ヵ月停留した後、巴西、臘子口、越岷山、哈達鋪、天水、梭羅鎮、通渭城、六盤山を経て呉起鎮に到着し、陝北十五軍団と合流したこと。直羅鎮の戦闘で蒋介石の陝甘辺区に対する第三次「围剿」を粉碎したことなどを述べる。
- ⑤ 1935年12月の瓦窯堡会議によって、抗日民族統一戦線の樹立が呼びかけられたこと、1936年10月によりやく一、二、四方面軍の三大主力が会寧で合流したことが述べられる。

劉伯承は末尾で次のように指摘している。「長征の全過程を回顧すれば、以下のことがはっきりと見て取れる。長征は『左傾』の誤った路線を徹底的に糾弾し、毛沢東の正しい路線による指導を確立して勝利を勝ちえたのである。また長征は張国燾の右傾機會主義路線とその分裂の陰謀との闘争を行い、毛沢東同志の正しい主張を堅持して勝利を勝ち取ったのである」と<sup>31)</sup>。

劉伯承の回想録は、政治色の濃厚な特徴を有している。1950年代から1970年代までの党による「長征」理解の標準であり続けており、『長征組歌』もその政治的評価に従っている。

## (2) 長征回憶録集

1956年7月から建軍30周年を記念して30年間の軍の歴史に関する回憶文集を作成することになり、1958年9月から1963年10月まで『星火燎原』全8集が刊行された（第5集と第8集は当時未刊行で1982年に刊行された）。『星火燎原』の発行は羅瑞卿（当時、中央軍委秘書長）、羅榮桓（当時、総政治部主任）の下で、蕭華（当時、総政治部副主任）所管の事業であった。『星火燎原』の中で、長征時期に関わる回憶録には、前述の劉伯承「回顧長征」を始め、楊得志「衝破天險烏江」、王集成「智取遵義」、張南生「遵義會議的光芒」、蕭応棠「巧渡金沙江」、楊得志「強渡大渡河」、楊成武「飛奪瀘定橋」、李湘濤「籌糧過草地」、蔡久「六盤山下的狙擊戰」、徐海東「會師陝北」などがある<sup>32)</sup>。蕭華の作詞の背景には『星火燎原』を初めとする多くの回憶録（「長征物語」）の存在を考えなければならない<sup>33)</sup>。

1940年代におおよその形を調える「長征物語」は、下表の(a)～(n)の要素から構築されている<sup>34)</sup>。これを『長征組歌』と対照してみると下表のとおりである。

長征組歌	長征物語
1. 告別	(a)「于都惜別情」
2. 突破封鎖線	(c)「突破烏江」
3. 進遵義	(d)「智取遵義」、(e)「遵義會議」
4. 入雲南	(f)「四渡赤水」、(g)「巧渡金沙江」
5. 飛越大渡河	(h)「彝海結盟」、(i)「強渡大渡河」、(j)「飛奪瀘定橋」
6. 過雪山草地	(k)「越雪山」、(l)「過草地」
7. 到吳起鎮	(m)「突破天險臘子口」
8. 祝捷 9. 報喜 10. 大会師	(n)「三大主力會師」

この対照表からは、蕭華の長征組詩の詞のイメージは、黄鎮の絵画、陸定一の長征詩、劉伯承の回想録、毛沢東の詩詞、そしてそれらと共通の枠組をもつ「物語」を素材として成立していることがうかがえる。合唱組曲『長征組歌』は、過去の記憶と情感の凝集であるこれら「物語」群を、歌詞と旋律を用いて「蒸留」することによって、「歴史」を「物語」以上に抽象化したものである。

言うまでもなく「物語」と「詩詞」とはその審美的な基準を異にしている。1965年8月の合唱曲『長征組歌』の公演に対するある評論は、それを評して「人の魂を動かす革命回憶録である」と述べた。この評価はこの作品の本質を衝いていると言わざるをえない<sup>35)</sup>。詩詞を用いて「歴史」を抽象化し、韻文の韻律と声楽・器楽の旋律をもって、情緒的な自己同一化を強要する「歴史の美学化」と考える<sup>36)</sup>。

### 第3章 合唱曲『長征組歌』の形成

そもそも蕭華には、長征組詩『紅軍不怕遠征難』を合唱曲にする用意があった。長征組詩完成直後の1964年11月中旬に、蕭華の要請で蕭華の秘書李圭と『解放軍歌曲』編集部の編集者が杭州に来た。蕭華が先に詩を書いた「歌曲」を試聴するためであった<sup>37)</sup>。

合唱曲の作曲について蕭華には腹案があった。蕭華は「北京軍区戦友文工団の何人かの作曲家同志は、民族形式に比較的習熟しており、多くの大衆が喜ぶ歌曲を書いている。まず彼らに頼んで、長征組詩に、比較的通俗的で、覚えやすく歌いやすい、民歌の特徴を持った曲を書いてもらおう。来年の「七一」か「八一」で公演するようにして、紅軍勝利30周年の記念としよう」と言う<sup>38)</sup>。

李圭は北京に戻り、蕭華の意思を中国人民解放軍総政治部文化部の指導者に伝えた。総政治部は、蕭華の長征組詩に基づいて大型の声楽作品を創作し、紅軍長征勝利30周年の記念にすること、この任務を蕭華の要望どおり北京軍区戦友文工団に委ねることを決定した<sup>39)</sup>。

音楽史研究者の梁茂春らの研究によれば、建国以来の歌曲の創作は各々の流派という観点から分析するのは容易ではない。それは明確な独特な風格の創作を行う流派がなかったためである。だが1950年代後半から、何人かの作曲家の作風の近似した創作グループがしだいに形成された。「戦友派」と呼ばれるグループもそのひとつであり、梁茂春らによれば、その形成と特徴はおおよそ以下のとおりである<sup>40)</sup>。

「戦友派」の作曲家たちは「戦友文工団」に集まった歌曲作家たちである。1950年に農耕が華北軍区文工団（「戦友」の前身）に配属され、1952年と1958年に唐訶、生茂が入団し、「戦友派歌曲」の基本的な創作者の陣容が形成された。

梁茂春らは、1950年代は「戦友派歌曲」の醸成期であると言う。1960年代は長征組歌『紅軍不怕遠征難』を代表とし「戦友派」の創作は成熟期に進入した。この一群の作曲家には長期の戦闘の経歴があり、部隊の戦士の思想と感情について深く理解しており、音楽の審美的観点も趣味もかなり一致している。彼らはみな戦闘と実践のなかで鍛錬されて成長してきた作曲家である。これが彼らの長所であり、彼らの短所でもある。彼らには深い民間音楽の根柢があり、とくに華北一帯の民間音楽について充分熟知している。彼らは戦士の性格を表現する作品に長じており、農村歌曲の創作も得意である。彼らはお互いに戦友のような協力関係があるほかに、歌手（馬玉濤、馬国光等）、作詞家（劉薇、洪源等）、およびその他の作曲家たちとも密

接に良好に協力しており、協力しつつ創作を向上させていた。事実、これらの作詞家と歌手も「戦友派歌曲」の共同創造者である<sup>41)</sup>。

この時期は勇壮な行進曲と優美な叙情曲が重なって出た時期で、どちらでも大きな成果があった。だが、1963年より音楽の「三化（革命化、民族化、群衆化）」の問題に関する討論が始まり、この時期の歌曲の創作に大きな影響を与えた。作曲家たちが民間音楽を学ぶ面で成功しつつある一方、「革命化」のスローガンに対する一面的な理解のもとで、歌曲の題材と体裁もますます狭隘になり、最後には領袖を称讃し、党を称讃する方向に収斂しつつあった。こうして「大海航行靠舵手」（王双印曲、郁文詞）、「毛主席、我們心中的太陽」（沈亜威曲、喬羽詞）、「聽話要聽党的話」（陳錫元曲、王森詞）、「毛主席的戰士最聽党的話」（李之金詞曲）、「好不過毛沢東時代」（陳志謙編詞作曲）、「爹親娘親不如毛主席親」（李劫夫為群衆歌謡譜曲）等の毛沢東礼賛の歌曲が生み出された<sup>42)</sup>。

1964年前後の時期は、文学芸術界に対し修正主義批判の締め付けが行われていた。上記陳錫元らの「聽話要聽党的話」（党の言うとおりにしよう）というこの曲名は、その時代の基本的な考え方を概括している。修正主義を警戒する毛沢東の批示が出てから、音楽創作は「左」傾化の度合を強めていった<sup>43)</sup>。

蕭華の長征組詩、およびその合唱曲化においては、この枠組を逸脱しない「戦友派」に依頼するのは自然なことであった。戦友文工団は、全軍の数十ある文芸団体でも影響力の大きな団体で、とくに伝統的な大合唱曲では突出していた。馬玉濤、馬国光、賈世駿、耿蓮鳳など拔群の独唱歌手もいた<sup>44)</sup>。

総政の命令を承けて、戦友文工団団長の張非、副団長の晨耕はすぐに各分団長会議を開き、短時間で200名余りの演者からなる合唱隊を組織した。団創設以来、最大の陣容となった。演者の平均年齢が25歳に満たないという、歴代で最も若い合唱隊であった。合唱隊を強化するために、分団から張振富、王伯華、馬子躍、閻祖榮、韓忠など主な歌手を動員した。また雑技団からも、葛玉亮など声楽の訓練を受けた人材を合唱隊に動員した。そして作曲は、晨耕、生茂、唐訶、李遇秋の4名の作曲家に委ねられた<sup>45)</sup>。

1965年4月下旬、晨耕、生茂、唐訶、李遇秋の4名が、主旋律の楽譜の初稿を持って、李圭に連れられて杭州に来て、蕭華の前で、一段一段、長征組詩の曲を歌ってみせた。作曲家たちは原詩に曲を附す都合上、若干の詩句を改変していたほかに、組曲としての構成上かなり大胆な「修正」を行っていた。12首からなる長征組詩の最後の2首は、長征終了後の時期を描いているものであることからそれを割愛し、その前の10首に曲を付け、合唱組曲としたのである<sup>46)</sup>。

晨耕ら四人は10曲の歌曲それぞれに、紅軍伝統歌曲、江西采茶、苗家山歌、湖南花鼓、雲南花燈、川江号子、陝北秧歌などの、大衆が喜んで聞いている各民族の民歌の曲調を、長征の主題に結合させて、鮮明な音楽的イメージを創造した。高度な政治思想の内容と可能な限り美しい芸術形式とをうまく結びつけようとしていた<sup>47)</sup>。

例えば、第1曲「告別」では江西南部の茶摘歌を用いて別れの愁いを描写した。第8曲「祝捷」では花鼓楽を用い、湖南籍の紅軍戦士が皆に向かい毛主席が戦闘の指揮をする情景を語るのを描写した。第9曲「報喜」では江西東北の茶摘歌等の江西の民歌を用い、紅軍を歓迎する大衆を描いた。ほかに、「遵義会議放光輝」では、貴州苗族の民歌を用いた喜びの旋律の後に「エコー」を加えて、各地の紅軍と党組織が「遵義会議」を支持する様子を表わした。

さらに上演の便宜のために、四人は元の歌詞を別の句で入れ替えることもした。たとえば、第4曲「四渡赤水出奇兵」では、最初の「送水」を加えた。第8曲「祝捷」の「大雪飛、洗征塵、敵侵攻、送礼品」という原歌詞を音楽の必要から「大雪（呀）紛飛（呀）、為我洗征塵、敵人侵攻、送來好礼品……」と変えている<sup>48)</sup>。

蕭華の前での「実演」では、唐訶がソプラノ、李遇秋がアルト、晨耕がテノール、生茂がバスの各パートを担当した。蕭華は基本的に満足し、作曲家の労を労い、各首の詞の意図、歴史的背景、重点となる内容について講義を行なった。そして曲に対していくつの修正を求めた。たとえば、第一曲「告別」は、紅軍が第5次反「包圍掃討」に敗れた後にやむなく行なった「戦略的転移」なのであり、重い気持で中央ソビエトに「告別」するのであるから、曲調は、ゆったりと余裕があるのではなく、重く沈んだ調子にすべきだ、と述べる。このような蕭華の指摘に作曲家たちは大いに啓発され、杭州滞在中に修正を行い、蕭華はこれを聞きこれでのよいとなり、リハーサルに入ることにした。晨耕等作曲家たちは、4月末になってようやく北京に帰った<sup>49)</sup>。

北京に帰り、主旋律にもとづき総譜を書くのは、正式な音楽教育を受けた李遇秋の仕事となった。李遇秋は河北省出身で、1940年に11歳で「抗中」へ進学し黄河大合唱に参加。1944年15歳で地下党から解放区へ移り、「抗敵劇社」（戦友歌舞団の前身）へ加入。1950年、上海音楽院作曲系に派遣され6年間作曲技法等を学んだ。『長征組歌』のオーケストレーションをするに当り、困難な問題がいくつかあった。1964年の反修正主義による「改革楽隊」の運動で西洋楽器はほとんど駆逐されており、民族楽器がいくつかあるだけであった。また当時、戦友歌舞団は歌手と器楽奏者を合わせて30人ほどしかないため、多声合唱のこの曲はやるには応援を仰ぐ必要があった。総政治部の采配と中国の伝統楽器と西洋音楽の楽器とを融合させることによって問題解決をはかり、この中西楽器の大合奏がかえってよい効果をあげた、という<sup>50)</sup>。

1965年5月初、戦友文工団は最善の陣容を整え、正式に『長征組歌』のリハーサルに入った。馬国光、賈士俊、馬玉濤など人気歌手がリハーサルと公演に参加した。当時37歳の若手指揮者、唐江が最初の指揮者となった<sup>51)</sup>。

蕭華が総政治部主任であったことから、合唱曲の上演は総政治部の任務でもあった。戦友文工団に作曲と上演が依頼されたことから、楊勇（北京軍区司令）と廖漢生（政治委員）が実施責任者となり、張正光主任とその参謀長が補佐した。総政の幹部たちは2ヵ月間リハーサルに参加した。特に、羅瑞卿と楊成武が来て長征を知らない出演者に長征の話を開かせてくれた<sup>52)</sup>。

この時期、周恩来が頻繁にリハーサルを見学し、具体的な意見を述べ、指導にあたるように

なった。偶然の機会から、周恩来が戦友文工団が蕭華作詞の『長征組歌』のリハーサルをやっていると聞き、たいへん喜び、すぐに車で北京軍区に駆けつけ、楊勇と廖漢生を伴ってリハーサルを見、ただちにこの作品に惚れこみ、出演者たちにこう言う。「蕭華主任が『長征組歌』を書いたときは病人だった。きみたちは必ず蕭華主任が書いた『長征組歌』の精神でもって『長征組歌』を練習しなければならない」。その日の夜、周恩来は杭州の蕭華に電話をかけてこう言う。「あなたは党と人民のために良いことをしました。子孫後代のために良いことをしました。あなたに感謝します」と。『長征組歌』は始めから周恩来の保護下にあったと言ってよい<sup>53)</sup>。

1965年7月、蕭華は療養先の杭州から天津に移り、戦友文工団のリハーサルも2ヵ月余りが過ぎたので、7月19日、戦友文工団は正式公演に先立って、天津滞在中の蕭華を訪ね、天津人民礼堂で『長征組歌』の予行演習を行い、蕭華の審査を受けることになった。北京軍区司令員の楊勇、政委の廖漢生、天津で病氣療養中の広州軍区政委の劉興元、さらに北京と天津の文芸工作者も呼ばれて参観した。蕭華は舞台に灰色の軍服、八角帽を被り、脚絆を巻き、草履を履いた紅軍が登場するのを見て、感激の涙を流した。予行演習を終えた戦友文工団は、北京にもどり、蕭華が出した意見によってさらに加工して練習を行なった<sup>54)</sup>。

1965年8月1日、建軍節に北京で正式に上演した。同月刊行の『解放軍歌曲』第8期が最初に『長征組歌』全部の詞曲を発表した。公演は、その後連続して30場余りも上演され、強烈な反響をもたらした。共和国建国16周年を祝う国慶節の夜、上演団は、天安門城楼西側で中央首長と労働模範代表のために上演し、周恩来等の称賛を得た。国慶節前後にも、上海で19場、南京でも11場上演され。その観衆は10万人を超すとみられている<sup>55)</sup>。

『長征組歌』は舞台芸術としても新鮮な試みが行われていた。先行する『東方紅』『黄河大合唱』の影響もあり、『長征組歌』では、歌詞の朗読、字幕、歌手たちの振り付け、幻燈による背景制作など舞台芸術としても凝った演出がなされていた。そして合唱団、楽隊、指揮者の全員が紅軍の軍服、軍帽で登場したことが、作詞者ばかりでなく、聴衆をも感動させ落涙させるほどの効果をあげたという<sup>56)</sup>。

『長征組歌』は文芸工作のイデオロギー面でも高い評価を受けた。既述のとおり当時は、音楽の「三化（革命化、民族化、群衆化）」が要求されていた。正式上演後の最初の論評は「社会主義文化革命の情勢が鼓舞する中で音楽に対しても「三化」の要求を出して以来の、合唱芸術の分野での新たな成果であり、人の魂を動かす革命回憶録である」と『長征組歌』を称讃している<sup>57)</sup>。「三化（革命化、民族化、群衆化）」の成果としての評価であることは、「戦友派」の作曲者たちが蕭華の意図通りの作品としたことを表わしている。

## むすびにかえて

先に本稿では、合唱組曲『長征組歌』とは、過去の記憶と情感の凝集である歌詞と旋律を用いて、「歴史」を「物語」以上に抽象化したものであり、これを「歴史の美学化」として概念化する、と述べた。本稿のむすびにあたり、その「歴史の美学化」の具体的な様相を概観しておきたい。それは『長征組歌』に盛り込まれた具体的な内容とその時代背景を対照し「歴史」がいかに審美的な抽象化を施されているかを解明することである。しかしながら、わずか10曲とはいえ、そのすべてについて分析するには紙幅が充分ではない。

1965年7月18日、蕭華が『長征組歌』の審査を行なったときのことである。第一曲「告別」が終わったときには、蕭華は涙で声が出せなくなっており、演奏はやむなく一旦停止したという。蕭華はその場で長征出発の情景を思い出したと言ひ、当時について語りだしたという逸話がある<sup>58)</sup>。よってここでは一例として、第1曲「告別」を検討してみたい。

「告別」の場合、原詩である長征組詩（1964年11月）と作曲後の『長征組歌』（1965年7月）では歌詞が書き換えられている。

（長征組詩）紅旗飄、軍号響。子弟兵、別故郷。紅軍主力上征途、戰略轉移去遠方。男女老少來相送、熱淚沾衣敘情長。烏雲遮天難持久、紅日永遠放光芒。革命一定要勝利、敵人終將被埋葬。

（『長征組歌』）紅旗飄、軍号響。子弟兵、別故郷。紅軍主力上征途、戰略轉移去遠方。男女老少來相送、熱淚沾衣敘情長。緊緊握住紅軍的手、親人何時返故郷？烏雲遮天難持久、紅日永遠放光芒。革命一定要勝利、敵人終將被埋葬。

これを比較すると、「緊緊握住紅軍的手、親人何時返故郷？（しっかりと紅軍の手を握り、軍は何時故郷に帰るのだろうか）」が追加されている。これは作曲の都合によるのではなく、内容面で「補強」する必要があったためであると見られる。

後に『長征組歌』の上演を指導することになる馬子躍は、これを上演する各地の合唱団のために上演要領をまとめている。「告別」の詞の解釈に関する馬子躍の指示は概ね以下のとおりである。

「告別」は、紅軍が国民党軍の第5回包圍掃討に敗北し、1934年10月、やむなく江西省から脱出する情景を描いている。1934年10月16日、于都城外の夕陽が山に沈む。于都河の波濤が次第に紅色から鶯色に変わる。川面の工兵が作った5つの浮き橋が人々の眼前にある。紅軍各路の大軍がすでに川岸に集合し、出発の準備をしている。今回の戦略的転移は秘密であるが、老百姓は長年の経験から紅軍が去ろうとしていることを知っている。彼らはすでに街頭で紅軍を見送っている。貧しい群衆が家中の食物を出して、卵、紅芋を煮て、黄豆を炒り、戰士のポケットに入れてくる。時に、白髪 of 老人が息子を見送り、新婚の妻が夫を見送る光景が見える。誰も「何処へ行くのか」と聞かない。誰も答えられないからだ。前線があり支援もない遠征だ。群衆は紅軍の手をとり涙を流し「帰って来いよ」の一言だけ。紅軍はこの転移がどこへゆくのか、いつ終わるのか知らないが、答えはきまって「必ず帰って来るよ」だ<sup>59)</sup>。

ここで強調されているのは長征出発時の、根拠地脱出の切迫感、目的のない遠征の不安、家族や友人との別れ、郷里との惜別である。それらを一句七言の「熱泪沾衣敘情長（熱い涙が衣を濡らし感情が高ぶる。）」の句に凝縮しきれず、作曲者たちは続けて「緊緊握住紅軍の手、親人何時返故郷？」を追加したと考える。

馬子躍はさらに長征の開始は敵の攻撃に耐えられずやむを得ず行なった脱出であったことを強調する。歌詞では「戦略転移」としているが、毛沢東が述べたように、敵の陣地戦で敗北を重ねるばかりで「その後転々と敵の主力と堡壘の間をさまよい、完全に受動的な地位に落ち入ってしまった。結局は第五次『围剿』戦争が一年の長さになり、自主生存の意志をなくした。最後は江西の根拠地を退出せざるをえなかった」と。また周恩来は「万里長征は、つまり江西で敗北したため、無理に消耗戦をやり、最後には耐えられなくなって、江西を退出せざるをえなかった」と言う。すなわち「左」傾路線の誤りによって紅軍の軍事上の失敗がもたらされ、やむなく転移を迫られたのである。まさに、歌詞に言う「紅旗飄、軍号響。子弟兵、別故郷。」である<sup>60</sup>。

ここで言う「『左』傾路線の誤り」とは王明路線の「軍事冒険主義」であり、党指導部の路線の変更がない限り、敗北が続くことが示唆されている。第1曲には「路線の誤り」に対する批判が込められている。そしてそれはこの後の第3曲「進遵義」の明るく雄渾な曲調の中で、遵義会議での毛沢東路線への転換とその喜びを描き、「万衆歡呼毛主席」という表現に到る長い導入ともなっている。その伏線として「告別」には「烏雲遮天難持久、紅日永遠放光芒（黒雲が天を覆っても長くは続かない。赤い太陽は永遠に光を放つ。）」という対句が盛り込まれている。

このようにみえてくると合唱曲『長征組歌』は最初の1曲から、毛沢東の権力掌握の正当性を謳い上げているという点で、「歴史の美学化」がきわめて政治的な含意を有するものであるといわねばならない。

蕭華は総政治部の幹部として軍の宣伝工作に尽力してきた。中央軍委の機関誌『八一雑誌』の創刊（後に『解放軍報』に吸収）。『解放軍画報』『解放軍文芸』『解放軍歌曲』など専門誌の創刊。体育団体（八一体工大隊）と文芸団体（総政文工団）の創設。映画制作所（八一電影制片廠）の設置。解放軍芸術学院、解放軍政治学院、軍事博物館など学校・博物館の開設など、いずれも蕭華の所管で行われた<sup>61</sup>。

歴史を題材とした合唱曲『長征組歌』の政治性をより明確に分析するには、「文化大革命」期における蕭華本人の動静と『長征組歌』の果たした役割を考察しなければならない。

1966年6月から9月まで、戦友文工団は、周恩来の外遊に随行してルーマニア、アルバニア、ソ連へ行き、『長征組歌』を数十回上演し、高い評価を受けた<sup>62</sup>。だが、彼らが帰国したとき中国ではすでに「文化大革命」が開始しており、出発前とはまったく異なる政治的環境に直面することになった。『長征組歌』は上演が不能になり、蕭華は7年間監禁された。やがて文革末期には、復活した鄧小平の庇護下で再演されるが、それは「文革」推進の江青派と対抗



関係に立つことを意味していた。合唱曲がきわめて象徴的な政治的意味をもって歴史の転換点に登場してくるのである。「戦友派」とは異なる「総政派」による『長征組歌』の作曲と公演とその意義を含めて、「文革」期以降の『長征組歌』の諸問題については稿を改めて考察したい。

### 【註】

- 1) 李鏡「《長征組歌》：上将詩人的病中之作」『党史博覽』2001年第1期、19頁。
- 2) 李鏡、同上、20頁。
- 3) 李鏡、同上、20頁。阿軍「《長征組歌》誕生記」『湖南文史』2003年第3期、51頁。
- 4) 阿軍、同上、51頁。李鏡、同上、20頁。
- 5) 阿軍、同上、51頁。
- 6) 阿軍「蕭華將軍与《長征組歌》」『文史月刊』2004年第7期、36頁。李鏡「《長征組歌》：上将詩人的病中之作」前掲、20頁。
- 7) 蕭華「紅軍不怕遠征難一為紅軍長征三十年而作」《長征大事典》編委会編『長征大事典』貴州人民、1996年9月、2278～2281頁。蕭華詞、晨耕等作『紅軍不怕遠征難：長征組歌、總譜』人民音樂出版社、2009年9月、「附録一、蕭華『長征組歌 紅軍不怕遠征難 原創歌詞』」186～189頁。作曲を担当した李遇秋の再現版も格律上の原則からは逸脱している。李遇秋「關於《長征組歌》的歌詞」蕭華詞・晨耕等作曲『紅軍不怕遠征難：長征組歌 總譜』人民音樂出版社、2009年9月、191頁を参照。
- 8) 黃鎮と『長征画集』については、さしあたり、以下を参照。范中匯「我当黃鎮秘書」『文化月刊』1999年第10期。卞国福「我与黃鎮兩次難忘的接触」『江匯文史』1999年第4期。卞国福「我与黃鎮同志的交往」『百年潮』2001年第3期。林衛国「黃鎮大使的文芸才華」『党史文苑』2006年第21期。朱洪「黃鎮与《長征画集》」『百年潮』2005年第10期。無痕「黃鎮与《長征画集》」『文史月刊』2008年第9期。
- 9) 無痕「黃鎮与《長征画集》」『文史月刊』2008年第9期、16頁。
- 10) 無痕、同上、16頁。
- 11) 朱洪「黃鎮与《長征画集》」『百年潮』2005年第10期、74頁。錢杏邨（1900—77）は中国の文芸批評家で、筆名を阿英、張若英。安徽省出身。1928年蔣光慈らと太陽社を結成し革命文学論争の旗頭となる。1930年中国左翼作家連盟執行委員となり旺盛な批評活動を行う。
- 12) 無痕、前掲、16頁。
- 13) 無痕、同上、16頁。朱洪、前掲、74～75頁。
- 14) 朱洪、同上、75頁。無痕、同上、16頁。李鏡、前掲、20頁。
- 15) 朱洪、同上、76頁。
- 16) 朱洪、同上、76頁。
- 17) 収録されている24枚の「画」は、1. 林伯渠同志、2. 過湘江、3. 遵義大捷、4. 貴州苗家女、5. 川滇邊干人之家、6. 背塩人、7. 彝族向导、8. 紅軍彝族游擊隊、9. 安順場、10. 瀘定橋、11. 炮銅崗之夜、12. 翻夾金山、13. 下雪山、14. 在藏族的村寨里、15. 三種鍋、16. 牦牛、17. 草葉代煙、18. 磨青稞、19. 烤餅、20. 背干糧過草地、21. 草地宿營、22. 草地行軍、23. 董振堂同志、24. 到達岷県哈達鋪、である。乃桐「一本珍貴的長征画集」『安徽日報』2006年11月10日。
- 18) 朱洪、「黃鎮与《長征画集》」前掲、76頁。
- 19) 朱洪、前掲、76頁。
- 20) 臧克家「鉄的洪流一讀《長征画集》」『人民文学』1963年Z1期。
- 21) 陸定一と長征当時の詩については以下を参照。劉明鋼「陸定一写于長征途中的詩」『党史縱覽』

- 2006年第5期。劉明鋼「陸定一与紅軍長征途中宣傳工作」『文史春秋』2006年第10期。王敬「長征路上的陸定一」『新聞与写作』2006年第10期。趙發生「紅軍長征中發布的唯一布告—憶陸定一同志与党的宣傳工作」『党史博采』1999年第3期。趙發生「我隨陸定一長征途中做宣傳」『炎黃春秋』1999年第6期。李安葆「長征勝利之歌」『党史文苑』1995年第6期。李安葆「長征征金曲—《打騎兵歌》」『党史天地』1995年第3期。
- 22) 劉明鋼「陸定一写于長征途中的詩」同上、13頁。
- 23) 劉明鋼、同上、14頁。
- 24) 劉明鋼、同上、14頁。
- 25) 劉明鋼、同上、14頁。
- 26) 劉明鋼、同上、14頁。李安葆「長征征金曲—《打騎兵歌》」『党史天地』1995年第3期、27頁。
- 27) 劉明鋼、同上、14～15頁。李安葆、同上、43～44頁。
- 28) 劉明鋼、同上2006年5期。
- 29) 毛沢東の詩詞については、さしあたり、武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』文藝春秋、1965年4月、を参照。毛の詩の歌曲については、上海人民出版社編『建軍五十周年歌曲集』（上集）、上海人民出版社、1977年9月、を参照。
- 30) 劉伯承「回顧長征」『八一雜誌』1959年21期（『人民日報』1975年10月19日轉載）。
- 31) 劉伯承、同上。
- 32) 劉伯承・徐海東等『星火燎原全集』第3卷、解放軍出版社、2009年。蕭華「回憶“少共國際師”」も同上書第2卷に収録されている。
- 33) 長征物語の形成と歴史的意義については、拙稿「『長征物語』の形成と背景—長征史研究の現在とその問題—」『目白大学人文学研究』第8号、2012年2月を参照。
- 34) 拙稿「『長征物語』の形成と背景—長征史研究の現在とその問題—」同上、を参照。
- 35) 呉祖強「動人心魄的革命回憶錄—聽長征組歌『紅軍不怕遠征難』」『人民音樂』1965年第5期、28頁。
- 36) 長征組詩のうち2首が使用されている、1964年の音楽舞踏史詩『東方紅』に関しても「歴史の美学化」として概念化することができることについては、拙稿「現代中国における「歴史」の再生—音楽舞踏史詩『東方紅』の場合—」『東洋研究』第189号、2013年11月25日、を参照。
- 37) 李鏡「《長征組歌》：上将詩人的病中之作」前掲、20頁。
- 38) 李鏡、同上、21頁。
- 39) 袁成亮「肖華將軍与《長征組歌》」『音樂生活』2007年11期、43頁。李鏡、同上、21頁。
- 40) 梁茂春、明言編『中国近現代音楽史』人民音樂出版社、2008年1月、630頁。
- 41) 梁茂春、明言編、同上、631頁。
- 42) 梁茂春、明言編、同上、632頁。
- 43) 梁茂春、明言編、同上、633頁。
- 44) 袁成亮「肖華將軍与《長征組歌》」前掲、43頁。李鏡「《長征組歌》：上将詩人的病中之作」前掲、21頁。
- 45) 袁成亮、同上、44頁。晨耕（1923-）原名陳宝鏢。生茂（1928-2007）原名婁盛茂。唐訶（1922-2013）原名張化愚。遇秋（1929-）原名李遇秋。唐江口述「1965～1975：《長征組歌》的十年」『縱橫』2007年第5期、33頁。
- 46) 孟蘭英「遇秋与《長征組歌》」『東北之窗』2006年05期、58頁。李鏡、前掲、21頁。
- 47) 李鏡、同上、21頁。
- 48) 袁成亮「肖華將軍与《長征組歌》」前掲、44頁。
- 49) 李鏡『儒将昇華』解放軍文芸出版社、1998年8月、593頁。李鏡、前掲、21頁。
- 50) 孟蘭英「遇秋与《長征組歌》」『東北之窗』2006年第5期、58～59頁。
- 51) 李鏡「《長征組歌》：上将詩人的病中之作」前掲、21頁。阿軍「蕭華將軍与《長征組歌》」前掲、36頁。

- 52) 唐江口述「1965～1975:《長征組歌》の十年」前掲、33頁。
- 53) 李鏡「《長征組歌》: 上将詩人的病中之作」前掲、21頁。
- 54) 李鏡、同上、21頁。顏梅生「開国上将蕭華和他的《長征組歌》」『時代人物』2007年Z1期、15頁。
- 55) 孟蘭英「遇秋与《長征組歌》」前掲、59頁。顏梅生、同上、15頁。李霄凌「蕭華: 興国“赤崽”写出《長征組歌》」『秘書工作』2006年10期、19頁。『長征組歌』は香港の音楽家、黎草田らも1965年香港で上演している。李鏡「《長征組歌》: 上将詩人的病中之作」前掲、21頁。
- 56) 任虹「贊長征組歌《紅軍不怕遠征難》」『人民音楽』1965年第5期、29頁。
- 57) 吳祖強「動人心魄的革命回憶録—聽長征組歌『紅軍不怕遠征難』」『人民音楽』1965年第5期、28頁。
- 58) 王文斌、馬菲菲、高護国「每一個音符都鐫刻在心里—《長征組歌》老藝術家41年後京城再聚首」『老同志之友』2006年第10期、9頁。
- 59) 馬子躍編著『怎樣排演長征組歌』大衆文芸出版社、2006年9月、1頁。
- 60) 馬子躍編著、同上、2頁。
- 61) 何立波『儒将蕭華在総政治部(上)』『党史縱横』2003年10期、5～7頁。
- 62) 李鏡「《長征組歌》: 上将詩人的病中之作」前掲、21頁。

(平成26年11月4日受理)